

21 国学者歌人石川依平と家系

著 者 岡本 春一

石川家の先祖を訪ねて見ると、石川依平が著した「家能武可志談稿」に依れば、初代は寺ヶ谷の山崎弥左衛門家です。慶長年間(1596～)に滑川(旧掛川市農協東山口支所跡)に分家して居を構えます。間口4間半、奥行き5間と当時としては中位の旅籠と同じ家作をしている所を見れば、相当の財産分与が有ったものと思われます。掛川藩御用達山崎万右衛門「松ヶ岡」の先祖も同家の出身です。

最初は農業を営んだと思われます。慶安2年(1649)家の財産である高割帳を見ると高20石5斗、内永川分1石5斗になっているので、相当の実力者にのし上がっていた事が証明されます。

明暦元年(1655)家作にもゆとりを持った初代惣太夫は、志都呂川根筋の馬継役を引受けます。

「其方事 志戸呂筋馬継肝煎申ニ付 石高貳拾石分 諸役免許仕様ニと被仰候依如件」
滑川 惣太夫

と、従って石川家の持高分大半が諸役御免となっている。そしてこの馬継役は2代目惣太夫も引き継いでいます。初代惣太夫は延宝6年(1678)80才の高齢で生涯を終わります。慶雲寺からは「一庵道陽居士」の戒名を贈られている。墓石は陣笠を着けられている事から、この地域では最高の地位にあった事を物語っています。

2代目惣太夫も引き継いで志都呂筋の馬継役を勤めていた事は、石川依平の「家能武可志談稿」にも「二代目も当家にて馬継役を致したる也」と記録をしています。2代目妻女の名は不明であるが、体も壮健であったとみえ13人の子宝に恵まれています。手先も器用な人だったとみえます。財も豊かになった惣太夫は次男、三男、四男に新屋を建て分家をさせます。妻女は分家した3人の子供に手織りの麻の袴を1組ずつ与えています。

3代目惣太夫は1、2代と隆盛の道をたどったが、不自由のない生活に甘やかされて育ったか、体質的に虚弱であったか一抹の不安を抱えていた。依平は「酒を好み世を楽に過ごす人だった。」と言っている。生来の本業に身が入らず子供も無かった事から、宝永元年(1704)妻の実家である千羽村大原子の庄屋伊達三郎兵衛方より、地域の信頼を受け村方諸帳簿を受取り、庄屋役を受取ったが身が入らなかったと云う。そして19才になった弟善八郎に庄屋役を全て任せている。

3代目惣太夫は正徳4年(1714)父母より早くこの世を去っています。

4代目惣太夫政成は貞享4年(1687)19才で家督を継ぎ庄屋の名代を継いでいる。生業に励み経営手腕にも長け、石川家の繁栄の一時代を作っています。22才で惣太夫政成を名乗り地域を代表する庄屋として頭角を現わします。正徳4年(1714)28才の時、八坂八幡宮の再建新築の話が出ると、東山口側の代表総代として陣頭指揮に当たります。棟札には

「新たに再建し奉る遠江国佐野郡牛岡莊新八幡宮本社並幣殿一字成就」

神主 菅田采女 藤原秀経
願主 伊達方村 庄屋 石川惣太夫
日坂 問屋 松浦弥五兵衛

とあります。

更に延享元年(1744)初代惣太夫が建てた家は東向きであったが、4代目惣太夫は南向きにして間口も5間、奥行き8間半と云う宿場の本陣にも勝る本宅を建て、東海道に面して長屋門を建てます。土蔵、別家等々11軒を建てている。東海道を往来する旅人もその威容の素晴らしさに足を止める程であったと云う。

この時代掛川藩内には一大事件が発生していた。俗に云う大盗賊日本左衛門が、民家を襲い金品財宝を盗み歩く。見付より掛川(大池村)に到り惣右衛門俵の結婚式の夜乱入、千両と云う大金が盗まれる。そして掛川藩に訴えたが動かなかった。これは直前に大井川下流の開拓工事を申し付けられ、藩内各地主に応分の寄付を願ったが、婚姻の事もあったか惣右衛門家はむげに断った為に、千両盗まれたと云うは偽証だと見向きもしなかった。

従って嫁の在所である向笠村の中村三右衛門は江戸幕府に直訴する。松平伊豆守(駿河国田中藩主)は危機を感じ、火消盗賊改め徳山五兵衛組を派遣した。やがてその被害が関西に及ぶに至って、掛川城主小笠原能登守長恭は管内初動不行届きの責めを負って陸州棚倉へ転封されます。

その後を引継いだのが関東館林の城主太田資俊侯で、掛川城主として入城します。太田氏は関東より遠路はるばる旅装で来ますが、石川惣太夫家は屋敷も広く、新築間もない素晴らしい邸宅であったから、太田侯を迎え入れるには申し分のない屋敷でした。太田氏一行は石川家で旅装を解いて、手厚い接待を受け腹ごしらえをして掛川城に入城します。

4代目惣太夫は大変如才ない人で接待をしたから、太田資俊侯とも息がピッタリ合い大変気に入って、その後資俊は早や駈けだとか、鷹狩りだとか度々石川家に来訪するので、惣太夫は新築の家に更に「御殿の間」を造り、落成の宴に資俊を招待したところ、大満足で酔った勢いに庭園の大石に登り、舞を舞ったと依平の手記にも出ています。(大石は石川家没落後、掛川宿山口楼に売却した)

この様な功績と交流から4代目惣太夫は地域全体を総括する大庄屋をこの時期に命じられます。又宝暦12年(1762)八坂八幡宮の神輿新築に際しては、各220文を惣太夫・九郎左衛門・太五右衛門の地域を代表する面々と顔を揃えている。

また城中重役との交流も有った事から、「俳諧」では影森の桃月堂の門人となり、自らも指月堂堆山を名乗っています。また「囲碁」では竹林亭安楽斎の号も持ち、対等な御付き合いの出来る教養を高めています。妻女は賀茂村から迎えるが政成39才の時に亡くなります。後妻は掛川城中との交際も広がったので、小笠原侯の重臣である高畑六郎右衛門の武家屋敷に勤めていた「はん」を娶っています。

5代目惣太夫政隆は享保14年(1729)生まれで、4代目惣太夫の繁栄の跡を引継いで行きます。宝暦4年(1754)26才の時に、家代村庄屋堀内佐次衛門重高の娘千代と結婚します。千代の家系は紀州新宮堀内城主の孫であると云われます。(雨桜神社祇園祭で八頭の馬を出す家系)。千代との間には4人の子供に恵まれます。長女「尾上」は13才で倉真村岡田佐平治

の新屋の岡田源八に嫁し 12 人の子供に恵まれます。長男惣太夫重高は 6 代目惣太夫を名乗ります。

惣太夫政隆は 4 代目惣太夫の繁栄の跡を引継いで行きますが、繁栄の余韻を駆ってか趣味は多種多芸であった様で、弓は見付の上村遊意の門人となり、立花、蹴鞠も好んだ様で、田舎の地主としては生産性に乏しく相応しく無いものであった。更に手先は器用で煙草盆、将棋盤を作り慶雲寺の位牌まで作ったと云います。4 代目惣太夫は素晴らしく家運を発展させたが、子供への躰が少し甘かった様に思われます。そして 5 代目政隆は 49 才の生涯を閉じます。

6 代目惣太夫重高は宝暦 10 年(1760)の生まれで幼名は亀蔵です。16 才の時 5 代目政隆が亡くなった。4 代目政成の築いた豊かな財政は 5 代目より順次陰りが出始めた。重高は親譲りの趣味は一層激しくなり、大酒飲みで弓は齋藤次右衛門に入門、俳諧は十住庵周竹の門人、立花・蹴鞠も行ない、和歌は掛川城内西川甚五右衛門の門人となります。

この様に多種多芸は浪費を伴い、経済観念を疎かにして生産意欲を失い、家業を顧みない墮落な世界に陥った重高は、石川家の豊かな財産を見る見る内に手離して行つた。遂には 4 代目が建てた自慢の本宅も別家土蔵も全て売りに出した。

本宅は下垂木村永江院の庫裡となったと云う。良い子が三代続けば家は益々繁栄して繁昌すると云うが、石川家は「良い子の三世」とは全く反対の家系となつて行きます。

4 代目惣太夫以来伊達方村大庄屋を 86 年間長期に渡り石川家が引継いで来たが、6 代目重高に到って遂に伊達方村太五右衛門に庄屋を譲る事になります。重高は寛政 4 年(1792)2 月慶雲寺の回向会が有り、その時に苦慮の策として韻経に詳しい僧侶が来たので名前を見てもらいます。6 代目の本人は兄殷(しげたか)、長男亀蔵は方救(よりひら)と、石川家の低落をふまえ名前を変える事で、幸運を掴もうと必死になって改名を行ないました。

6 代目重高の結婚であるが 22 才の時、元明元年(1781)親戚筋に当たる田中村の堀内清兵衛紀重救の 3 女「琴」と結婚しますが、痛風もあって 17 才の若さで亡くなります。寛政元年(1789)重高は 30 才になり経済破綻で本宅も売払い、残った侘しい中で榛原郡湯日村滝専右衛門の養女「民」18 才と再婚します。親戚を集める広い家は無いので、弟茂右衛門の家を借りて異例の結婚式を挙げます。そして侘しい仮住まいの長屋門で細々とした再婚のスタートを切ります。

寛政元年(1791)正月元日午の刻に 1 人の元気な男の子が生れます。この子が主題の石川依平の誕生です。この様に零落した石川家を見るに見兼ねた、掛川藩内でも一流の大庄屋である各地の親戚一同は、寛政 7 年(1795)重高 36 才の時、何とかして石川家の再興を図ろうと願って、掛川藩に 200 両の無尽を作り 1 割 3 分の貸付で 9 年賦の講を願い出ます。幸い保証人は掛川藩一流の大庄屋であるから、早速藩はお聞き届けになります。

享和 2 年(1802)その金利 63 両が、「伊達方惣太夫相続金」として払い下げになって石川家に渡されます。今度こそ石川家の再興が図られるものと親戚一同も安堵の胸をなで下ろします。しかし当の 6 代目重高は世事にうとく、経済観念が全く無いので、その金を弟茂右衛門に托し水田開発に当て再興を期しましたが、計画がズサンで水源に乏しく旱魃で絵に画いた餅に終わります。重高は 65 才で隠居の身となり 78 才でこの世を去ります。

石川依平の生涯

石川依平は寛政3年(1791)正月前記の様に貧しい長屋門で生まれました。幼名は亀蔵、通称は為蔵で父惣太夫が家の再興を図って韻経に依り名付けたもので、方救(よりひら)であるが、本人は通常「依平」を用いています。依平が和歌の道に入ったのには、3つの大きい理由があったと思います。

- 1、産れつき和歌に興味を持っていた。天才の道筋であったことで最初から和歌に食い付いていた事。
- 2、次に父重高が和歌に興味を持ち、寛政年間の頃より掛川城下の西川甚五衛門の門人となり、常に可愛い息子依平を巾着代わりに和歌の師匠の所に連れて行きます。そこで和歌のイロハを身に付けたと思われます。
- 3、今一つは祖母千代53才が大庄屋の娘で教養を身に付けていた事から、興味を持ち始めた依平の和歌のイロハを補っていた事。母親は2人の子供の子育てと家事で多忙であったから、祖母千代が母親代わりになっていた事。

が考えられます。5才の時「初めて歌の様なもの詠をめり」と有ります。詳細は判りませんが「うれしいな門の柳に手がとどく」の一説もある。子供に相応しい歌です。依平の著書に「柳園雑記」など柳を用いている事に関係があるかも。

寛政8年6才になると八坂八幡宮奉納額に

「君が代の 松の千歳を 神つ幾 行く末栄ゆる 敷島の道」

同年伊達方諏訪神社に奉納した額に

「あきらけき 神路の山に 後垂れて 千代や栄えん 松のことの葉」

があります。古典の枠の中にきっちりハマったもので、子供の歌の感覚では無い素晴らしいものです。

この和歌を見る限り依平は18才で国学に目覚めたとありますが、既にもうこの時期に国学の要素は、和歌の感覚から多分に有った事が分かります。同じ6才の9月に依平は父重高に和歌の師匠の所へ連れて行った帰りに、掛川宿のうどん屋金八の店に立ち寄ります。亭主に和歌が大変お上手であるから、1句書いて呉れないかと要望されます。すると早速、

「秋深き 庭の真垣に 色添えて 咲きそむらん 露の白菊」

と書留めて差出したそうで、亭主もさぞかし驚いた事と思います。

従って此の様な事は掛川城中にも伝わります。城主太田資愛侯の耳に留まり、早速城中に呼出しがありました。そして家老重臣の列座の中で四首の課題が出されたので、一考の末にしたためて差出しました。

霜月夜 山の端の 梢あらわに 置く霜の 影も消えゆく 冬の夜の月
浦千鳥 行き帰り しばし鳴きつれ 友千鳥 声も高けれ 須磨の浦波
野 雪 空寒み 降りまさるらん 白雪の 積りうつれる 冬の夕暮れ
友千鳥 風さそう 音ぞ淋しき 夕暮れに 友呼び連れて 千鳥鳴くなり

と四首を差出しました。さぞかし連座の重臣も驚いた事だろう。とても子供の作とは思えない作風に城主太田資愛も感嘆して、色紙短冊100枚と千歳紙を御褒美として与えたと云い

ます。

この事は太田資愛が江戸幕府の老中となると、江戸城中でも話題となります。和歌の造詣の深い大名の大和郡山侯の耳にも入り、江戸より帰路に石川家に立ち寄り一首を所望したところ早速、

吹く風の 音も激しく 宇津の山 木の葉にうずむ 薦の細道
としたためて差出しました。郡山侯は感心して

いとけなき 心にかくる 和歌の浦 並々ならぬ すさひをそ思う
と一首を依平に与えたと云います。

また幼少時の依平の和歌の話を聞いた本居宣長は、その作風を聞いて「これは野狐の仕業ではないか」と、いぶかしがったといっています。

こうした大和郡山侯との出会いに依って、寛政 11 年(1799)その紹介を受けて石川依平は遂に、当時和歌の総本家とも云える冷泉家為泰卿の門人として入門が許されて、父親に連れられて京都に行き修行に入ります。

大須賀鬼卯著「東海道人物誌」に「日坂駅 冷泉家御用人五歳より詠歌
名方救 伊達方石川為蔵」として紹介されています。

国学への誘い

石川依平 17 才になった文化 4 年(1807)、冷泉家の和歌の勉強が進む中で、冷泉家では和歌に関する本以外は、読まない様に指導されていたが、ある時本居宣長の著した「玉霰」を一読するなり、大きい衝撃を受けました。私は今和歌一筋に勉学して来たが視野を今一度広めて、日本古来の歴史に目を向けるべきだと、爆発的にこの思いは大きく成長していった。

そしてその一首をしたため、

「玉霰 たばしる音に 冬草も 住まい兼ねてぞ 打ちなびきける」

とその思いを和歌にして、国学への思いを一層つのらせます。そして遂に文化 5 年 18 才になった依平は一大決心をして、9 年間お世話になった冷泉家に厚くお礼を述べて帰郷します。

そして内田村平尾八幡宮の宮司で国学者であった栗田土満の門を叩き、入門が許されます。その固い決意を和歌にします。

「三輪の山 杉立門も 見えわかり 霞の中に 道しるべせよ」

と国学者賀茂真淵の一番弟子である栗田土満に差出します。土満は過ぎにし神の代々の古事の中にこそ、神国日本の教えを解く国学の基礎が隠されていることを示唆しています。そして自己の名前も「方救」より「依平」に変えて、この道に精進する一大決意をします。

こうして石川依平は古事記並びに日本書紀の研究を重ねると共に、国学者として急成長して行きます。文化 8 年(1811)依平が一番頼りにしていた栗田土満が 75 才でこの世を去ります。依平は周辺の国学者と交友を深めると共に、歌人としても独自の道を切開いて行く事になります。

石川依平の結婚

結婚に就いては不可解な面もあるが、依平自身の書いた「家能武可志談稿」に依れば、父親の妹「尾上」の長女「その」と 23 才の時結婚しています。父の妹尾上は倉真村岡田佐平

治の新家である、岡田新八に嫁し 12 人の子供に恵まれます。長女のそのは 14 才で同村岡田十兵衛に嫁したが和せずして離婚。16 才で横須賀城下の立石清八に嫁し再び離婚。19 才で相良港の八木三郎左衛門に嫁したが亡くなったので、倉真の実家に出戻っています。その 3 回も離婚歴のあるその 24 才と、石川依平 23 才が文化 10 年(1813)に結婚しています。

昭和4年東山口村青年団の要請をうけて、郷土史家後藤肅堂が「歌人石川依平」を著します。これに依ると第6章「恋の依平」で熱烈な恋愛の末に理想的な浅井氏の娘を娶ったとありますが、之は全く偽説で浅井吉右衛門は浜松宿飯田屋です。父の妹尾上の6男が養子に行き結婚した相手の娘です。

依平は国学者・歌人の道を真直ぐに精進しています。従って結婚は二次的なものと考えていた様です。そのは37才で子供も無く亡くなっています。

肅堂の言では妻亡き後再び激しい恋に落ちたと云い、袋井に悪友に誘うわれ依平は女郎買に出掛けた。そこで野川と云う女郎が気に入り身代金を持参して行っただが、女郎は身受けされた後で地団踏んで悔しがったという。その時の歌は、

流れ出て 誰が苗代に 掛るらん 春の野川の 水の行く末

と云うが、女郎の身請金ともなれば端金では出来ない。清貧でこの時期は日坂宿伝馬所の帳付け役にアルバイトしている依平にそんな余裕の金は無。更に掛川藩との付き合い、国学者仲間と交流の時期である。再び熱烈な恋に落入ったとあるが、後妻は前妻その、の妹「いま」です。いまは 19 才で掛川城内の志村与八郎に嫁し、6 年連れ添ったが離婚して倉真の実家に出戻っていたものです。肅堂の云う熱烈な恋愛とは考えられません。

国文学と石川依平

国学は「古事記」{日本書紀}「万葉集」等の古典を、日本固有の文化としてその精神を研究しようと始めたもので、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四大学者が、その流派を開いたものと云われています。

石川依平は前述の様に本居宣長の著した「玉霰」に感動して、賀茂真淵の愛弟子内田村の栗田土満の門人となって、その研究に没頭します。

荷田春満—賀茂真淵—本居宣長

一内山真龍 一小国重友

一栗田土満一石川依平一山崎八峰

文化9年(1812)遠州地方の国学の祖である賀茂真淵の50年祭に当たっては、人の為に面倒見の良い石川依平は、その発起人として活躍しています。又別の話として、内山真龍が「日本紀類聚解」の成果を15巻にまとめ、光格天皇に献上します。その感激を内山真龍は和歌にして石川依平に送って来ます。

長浜の 浦の芦田鶴 千代を嫁てとも 雲井までとは 思はざりしを

22 才の石川依平は早速返事を出します。

飛び翔り 雲井になきし 浦田鶴の 千代の形見を 扇ぎてぞ見よ

と内山真龍の歌が光格天皇に届いた感激の一首もさる事ながら、依平の返歌は一段と冴えております。その戴いた田鶴の描かれた扇を巧みに生かして、形見としてその扇であおいで見

よと、素晴らしい返歌として結んでいます。そして石川依平は国学者として、掛川藩の重鎮並びに藩士の教養面で大いに活躍して行きます。これは依平の「門人名簿」に数多くの掛川藩士、重鎮の名が連なっている事でその証明が出来ます。こうした功績により石川家に残る御書付に時代は不明だが、

覚 三人扶持 伊達方村 惣太夫(依平)

其方儀従来国学ニ志厚ク 追々倭歌ニモ長ジ 常々身ノ作状モ宜敷

相聞候ニ付 為御褒美三人扶持被下候 以来御用向ヲモ申付可有之候 以上

十二月 口達 御城内 木履御免

掛川藩三大文化の成立と石川依平

文化2年(1805)2代目太田資愛は江戸邸で亡くなります。従って3代目太田資順はこの年6月、今だ見ぬ掛川は如何なる処か夢見ながら、期待に胸をふくらませて、藩校教授松崎慊堂を伴って掛川入りをします。慊道は一日も早く理想的な藩校を開校させようと構想を練って到着します。

入城と共に全く想像もしなかった事態に遭遇します。「慊堂遺文集」にも有る様に「藩の金庫には一両の金も無い。」と嘆きます。さらに狭い部屋で下級武士と雑居し、並んで食事をしたり魚を串で差した様にして寝ている。慊堂とすれば狭いながらも一部屋位与えられ、客人と対応出来る位の待遇はあると考えていたが、全く宛てが外れてしまいます。

しかしながら文化年間早々に「掛川藩校」の建設、「掛川誌稿」の編纂事業、「偕楽園」と云う娯楽施設の開園が早々に実現します。この実現には藩主の実力、松崎慊堂の企画力と、何よりも山崎晨園をリーダーする金子御用達が5、180両と云う大金の経済的支援が実現した事が基因です。他藩では見られないこの三者の固い結束力によって、掛川藩三大文化を開花させます。

此处で注目すべきは「掛川誌稿」の編纂で、幕府が昌平校に地誌局を設けて、各藩に地誌を作らせる5年も前に、既に掛川藩では掛川誌稿の編纂を始めた事です。之は松崎慊堂の手腕に依るもので、藩は早速各村々に村高・人口・地理・歴史等々調べさせ、藩士齊田茂先が第1～6巻を山本忠英は第7～14巻の編集を命じますが、両者は比較的若くて亡くなりますので、実質的には藩校教授松崎慊堂と石川依平が校正監修を行なって完成させます。

注目すべきは「掛川誌稿」の原本15巻が松ヶ岡山崎家に有る事から、経済的支援のみならず場所の提供等の深い関わりか考えられます。松崎慊堂は江戸の人であり、石川依平は地元人間として地域の詳細を把握しているから、編纂事業には貴重な史料の発掘や補足等深く係わって完成した事が伺えます。

石川依平とその門人達

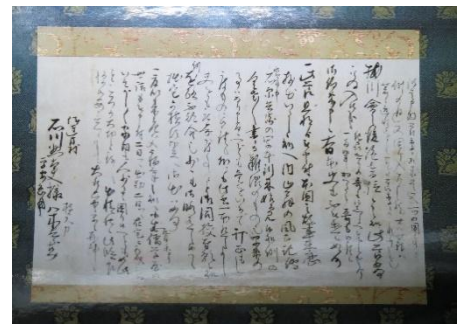
石川依平の門人は「柳園詠草」安政5年(1858)の記録に依れば、13ヶ国248人となっています。掛川市史では名簿を送られた者300余名に及べりとあります。門人の中には束脩(入学金)を払って入門証を戴く者、その都度謝礼だけで済ます者も居たと思います。

依平の所には文化年間から天保年間(1804～43)に掛けて、掛川藩の各階層の武士の入門が多く見られます。県外の者も多く、大体 20 才～40 才位の人達が門弟として学んでいます。

また依平が温厚で面倒見の良い事から、仲には図々しい人間は数日間依平の家に寝泊まりする食客もいた。依平はいやな顔一つせず納得の行くまで講義をしたと云います。又手紙には長期に指導を受けたいので、旅籠の幹旋をお願いした者もあって、中の宿である山鼻の旅籠を紹介した手紙も残っています。

依平の家は東海道筋に在った事から、例えば参勤交代の途次に立ち寄る例もあった。三河国刈谷藩の御殿医師村上忠順の記録に依ると、事前と事後に和歌を送り、石川依平に指南を受けた手紙が 20 通ほど有ったので、先年愛知県豊田市の郷土史研究会の人達が、バスで石川依平の旧地を来訪し、講話もお願いしたいとの連絡が有ったので、石川家の墓地の整備も行ない、旧東山口農協支所の会議室を借りて供養祭も行なって招待しました。

近郷の有名な門人には、横須賀藩校教授の八木美穂がいます。何通かの手紙も残っております。「私は今藩校の教授をしたり、自分の調べものをしています。中々暇が無いが依平氏もお暇を見て遊びに来て下さい、歓待します。」等種々の手紙も残っており、広いお付き合いの一端が伺えます。



石川依平と遠州報国隊

江戸時代、時代の趨勢の中で幕末になると尊王攘夷論の高まりと共に、国学の重要性が叫ばれます。そして国学を学ぶ者が多くなって来ます。慶応 3 年(1862)徳川慶喜が大政奉還をするに及んで戊申戦争が起こります。反抗する旧幕府軍討伐が開始されますと、有栖川大総督の率いる東征軍が結成されます。当地は遠州報国隊が結成され、駿河の国では赤心隊、伊豆では伊吹隊が結成されます。

この主力になったのが、石川依平を始めとする国学者から国学者を学んだ人達と、神職を中心とする人達で遠州報国隊 161 名の隊員が結成されます。その内 74 人が選抜されて東征軍に参戦します。掛川地域では桜木の雨桜神社を中心とする神主が参戦します。

掛川藩は譜代大名の立場から徳川氏に忠誠の証を立てる為に、東征軍と戦闘するが偽戦であるからすぐ後退する。と云う家老若林家の文書も有る様に、城内は佐幕派と勤王派両派に別れて俄に騒然となります。首席家老須貝十郎左衛門と勤王派の太田資逢の二派に別れて葛藤します。勤王派の太田資逢の所には遠州報国隊の隊長の大久保春野、並びに事任八幡宮の宮司の朝比奈蔵之進等が膝詰談判を行ない「申入れを聞かなければ佐幕派の家老を斬る」と一刻の猶予も許されない苦境に立たされます。

戊申戦争は江戸、会津、甲府各地で展開されます。東征軍は有栖川宮の指揮下で各地に転戦をします。掛川藩も徳川氏に忠誠を尽す為に参戦します。明治元年(1868)上野彰義隊の敗戦、会津藩の投降等に依り、東征軍の目的は達成され戦乱も漸く決着するが、政権を取られた武士の残党は収まらず、三保神社神主の太田氏は幕臣に襲われて殺されます。

掛川藩でも出陣に当たって相当の軋轢が有ったのか、家老格の河野十郎左衛門は帰郷した

8月掛川城大手門の四辻で残党に「河野は邪魔だ」と袈裟懸けに斬られ惨殺されたと、河野家文書で新事実が発見されました。一方報国隊で中心的役割を果たした事任八幡宮宮司朝比奈蔵之進は、前記二者を始めとする事件を聞いて帰郷と共に身の安全を期し、即刻江戸に出奔し名前も菅田束稲と変名し、大村益次郎が創立した招魂社(現靖国神社)の社司となって身の安全を図りました。

人間石川依平

石川依平は大変手まめな方で、印刷技術が進まない時代に自分の書いた「柳園詠草」10巻、「柳園雑記」31巻、更に「古事記」「日本書紀」「万葉集」20巻、「掛川誌稿」15冊、等限りなく多数の自筆書を持っています。

また面倒見の良い事では、教え方の方法もそうですが、祖師賀茂真淵の50年祭の企画実践、並びに浜松縣居神社創設の大世話人、伊達方慶雲寺再建の総代世話人を勤める等限りなくありました。

榛葉道蔵さん談。城主から和歌の才能を見い出されて御褒美を戴いた依平が、更に10年程京で勉強し帰郷した時、近所の方が「依平様、歌と云うものは大変ムツカシイものでしょうね」と伺った所、即座にいとも変わらぬ笑顔で「いや歌と云うものは、今貴女が言った事は既に歌になっているですよ」と、いいですか

「の頃は 君はいずこに おわしませ 暫くお目に かからざりけり」と、いとも簡単にこれを五七五七七に並べ替えて教えて下さったと云います。こうした素晴らしい教授法で、素人には素人らしく、門人には門人に相応しい指導をされたと思われます。

牧之原開拓に力のあった丸尾文六の回想録の中に、恩師石川依平の言として「学問は怠ってはいかん、歌ばかり作っているより本を読まなければいかん」と示唆に富んだ話も残っています。

又交流のあった日坂宿の伊藤文一郎の祖父談、依平をよく知る談として、「我が好きは 小理屈タバコ 長話 竹の子とろろに 桜咲く頃」と依平の性格をよく捉えた歌になっています。石川依平は安政6年(1859)前年70才の祝をしてもらい、69才で生涯を閉じています。依平は前妻そのとの間に子供は無く、後妻いまとの間に2人授かりますが次女むろは早世、長女やぎは金谷宿から河村為一郎を養子に迎えています。

最後に今一つ大事な事は、郷土掛川の誇りであります国学者歌人石川依平の顕彰事業を行なうべきですが、残念ながら進んでいません。平成15年愛知県豊田市郷土研究会がバスで来訪の知らせを受けたのを期に、市教育委員会と折衝して荒地同然の墓地の整備を進め供養祭を行なったが不十分です。墓地公園化し顕彰する構想も私一人の空想に終わりそうで、顕彰の在り方に就いて一考願いたい。

